SNS を利用した大学生のコミュニケーション意識調査の比較から

（国際教養学部国際教養学科）

中田　美喜子

Communication of college students using SNS —Comparison of consciousness survey—

(Hiroshima Jogakuin University)

Mikiko Nakata

SNS を利用した大学生のコミュニケーションについて自己隠蔽度の高低群における比較を 2014 年に調査した。その後 SNS にも新しいものが出現しており、大学生のコミュニケーションにも変化があるのかについて 2018 年に調査を行い比較した。

キーワード：SNS、意識調査、大学生、コミュニケーション

1. はじめに

現在 SNS（Social Networking Service; 以下 SNS と記す）は急速に拡大を続けており，社会問題にも発展している。2008 年 Twitter や Facebook が国内でサービスを開始した時には考えられなかった影響も与えている。特に最近では、「バイトテロ」という名称のついた現象も多数報告されている。アルバイト先で不適切な動画や画像をインターネット上の SNS に投稿する行為がテレビでも報道されている。このような行為が社会問題になった時に指摘されたのは、「SNS はだれが見ているかわからない公共の投稿の場であることを理解していないのではないか」ということであった。実際に投稿した本人の供述でも、「友人に見せようと思ってやった」といったことから、SNS が世界中でみられる可能性があることを知らない、公開を限定して投稿することを知らないなど「SNS の使い方や仕組みを知らなかった」ことによる結果であると思われた。しかし、その後も報道からすると、減少することなく増加していくような傾向にあるように思われる。

本来 SNS は人と人とのつながりを中心に設計されたコミュニケーションプラットホームであり、それらを利用できる携帯電話・スマートフォンなどの情報伝達機器は生活には欠かせない必要不可欠なツールとなっている。そのため、SNS を利用する新しいコミュニケーションの機会も増加している。これらの新しいコミュニケーション方法は、コンピュータ間コミュニケーション（CMC: computer mediated communication; 以下 CMC と記す）と言われ、大学生における人間関係にも様々な影響をあたえている

特に、インターネット掲示板や SNS の利用は匿名性も高く、多くの人にとって交流の場となっている。SNS とは、人と人とのつながりを促進・サポートするコミュニティー型の Web サイトであり、友人・知人間のコミュニケーションを円滑にす

る手段や場を提供し、趣味や嗜好や居住地域、出身校、あるいは友人の友人といったつながりを通じて新たな人間関係を構築する場を提供するサービスである。しかしながら、このようなインターネットの普及に伴い、サイバー犯罪も増加し利用者の危機管理も問われているとされている。特に若者において、携帯電話・スマートフォン、パソコンは人間関係を構築する必要不可欠なツールとして認識されている。

一方で、近年の若者の人間関係の希薄さも指摘されている。例えば、「メディアの悪影響」や「社会性の欠如、コミュニケーション不足」等、様々な要因が指摘され、若者の人間関係に関する研究が注目されている。CMC は現代社会においては、ネガティブ側面、ポジティブ側面を持ち人々の生活的側面だけではなく心理的側面に与える影響も大きい。特に近年の大学生は小中学生時より携帯電話を所持し、パソコンにも慣れ親しんでいるデジタルネイティブの世代であり、CMC を頻繁に利用する世代として挙げられる。さらに若者の特徴として、内面的な話題は避ける傾向があり、明るく表面的な関係を築く傾向がある（中田, 2015）。大学生にとって、携帯電話は単なる情報手段ではなく、最も身近なコミュニケーションメディアであると報告されている（尾上, 2007）。

しかし SNS の普及により、非常に大きな変化も起こっていることが報告されている。例えば、地震などのニュースで取り上げられた話題がすぐに SNS に入ってくる。1995 年1月 17 日に発生した阪神大震災に伴う混乱は、従来の通信連絡網 が遮断・寸断された状況下にあって人と人、人と情報を結ぶインターネットの必要性の大きさを感じた出来事であった。また 2011 年 3 月 11 日の東北大震災においても、ほとんどの電話が不通となり、携帯電話も中継局などの損害によりほぼ全滅となり、携帯メールも送付してから届くまでに数時間から数十時間を要したと報告されている。このような中、ほぼ通常と同じように使えた連絡手段は、ツイッター「安否確認だけでなく、政府や各自治体、報道機関が発表した情報なども書き込まれたため情報入手手段として大変有効であったと報告されている。また、特定の人との直接やり取りができるダイレクトメッセージは、電話やメールのやり取りができないときに有効であった。」スカイプ（インターネット電話）「都内では地震発生数時間後に通話ができたが、緊急電話番号 への発信は難しかった。」災害用伝言板「パソコンや携帯電話から書き込まれた伝言を閲覧できたが、回線が 不安定な時間帯ではつながりづらかった。」ワンセグ放送「携帯電話回線やインターネット回線に接続されて いなくても視聴でき、地震発生直後から安定していた。」これらが有効であったと報告されている。また Google メールサービス（Gmail）も比較的つながりやすかったと報告されている（目黒ら, 2011）。

このように利便性の高い SNS ツールは、人とのつながりにおいて無限の可能性を秘めているため様々なメリットがある。気軽に利用できる、本音で話せる、幼稚園や小学生の頃の古い友達と連絡が取ることが可能、地域にとらわれずに世界中の人とつながれるなど SNS のメリットは、時間や場所にとらわれず、いつでも世界中の人とつながることができるということがあげられる。しかしデメリットも報告されており、コミュニケーションの低下、いじめや自殺の誘発が存在し、あがり症や人見知りなどの人にとって SNS は便利なツールであるが、気軽に利用ができるという事で悪口やいじめのはけ口になってしまい、相手を傷つけてしまうことも多い。また、コミュニケーションの低下が進み、学業や仕事などにおける対人コミュニケーションを必要とする場面が苦痛でコミュニケーションの成長にも悪影響をもたらす可能性があると報告されている（足立ら、2003）。

そこで 2014 年大学生を対象として SNS を利用した新しいコミュニケーションとして質問紙の調査を実施した（中田, 2015）。自己隠蔽と自己開示および SNS の利用や PC・携帯電話の利用などを調査した。その結果を自己隠蔽度の高低群で比較し、「親しい友人の数」においてと「学内はうわべだけの表面的な付き合いが多い」において有意差が認められた。すなわち自己隠蔽の低い群において、「10 人以上の友人がある」ものが有意に多く、「1から 9 人まで」は有意に少ないことが示された。自己隠蔽度が高い場合、対面における対人関係においても人数が制限される関係になっている可能性があることが認められた。

SNS に書き込む内容についての質問項目では「好きなもの（音楽・映画・服装など）」「休日の過ごし方」「最近の楽しかったできごと」「最近夢中になっていること」「趣味にしていること」「楽しみにしているイベント」「これから趣味と

してやってみたいこと」については両群において、50%以上が「少し話す」「よく話す」という結果となった。楽しいこと、趣味について SNS に多く書き込む傾向があることが報告された。どちらの群においても比較的書かない回答が多く、「何も話さない」「ほとんど話さない」が自己隠蔽の高い群では 76.7%と高い回答を示し、自己隠蔽の低い群では 69.1%であった。また自己隠蔽の高い群では、「少し話す」が 16.7%であり、自己隠蔽が低い群では 22.7%であった。これらの結果から、SNS に書き込む内容は、楽しいことや趣味について記載していくことが多いことが認められ、自己隠蔽の低い群では「個人的に落ち込んでしまうこと」なども「少し話す」という回答が自己隠蔽の高い群に比較して有意に多いことから、自己隠蔽の低い群では落ち込んでしまうことも書き込みを行っている可能性もあることを示した。

2014 年の結果は広島県内における大学生で収集したデータであった。2017 年に東京の大学生対象にこの結果を発表し意見を求めた。2017 年のため、大学生が利用する SNS の種類も増加しており、Facebook、Twitter だけでなく、Line・Instagram などもよく使う SNS として話題にあがった。学生たちの使い方としては、情報収集には Facebook を、友人などとの連絡には Line を利用し、内容や状況によってそれぞれの SNS を使い分けているということであった。また Facebook なども、個人が特定できるような投稿と、趣味だけでつながる場として 2 つの ID を使い分けて利用しているという報告もあった。2014 年における調査では積極的な利用についての結果は認められていない。これらの内容が、3 年以上経過しているための経年変化であるのか、地方と東京における大学生の意識の違いであるかは明確にはできなかった。そこで、本研究では 2018 年に 2014 年と同様の意識調査を行い分析することで、新しいコミュニケーションツールの一つである SNS についての意識に経年で違いが生じるのかを検討することを目的とした。

2. 方法

調査対象者および実施日

広島県内の大学生 328 名（男性 175 名、女性 153 名、平均年齢 19.0 才）を対象に、質問紙による調査を、2018 年 7 月から 2019 年 1 月に実施した。ネット上において東京の大学生に調査を実施することは可能であるが、実際に本当の大学生が回答しているという保障が得られないため、地域による意識の差については別の機会に検討することとした。

調査の方法

アンケート内容は、2014 年度の調査項目と同様のものを使用した。SNS の利用項目については、2014 年にはまだ存在していなかった SNS の Instagram や Line などの利用が現在は増加しているため、それらを追加して項目を再編成した。性別、年齢、パソコンの使用頻度、携帯電話の使用頻度、友人関係について、パソコンを用いたコミュニケーションツールの利用頻度、SNS とブログについて別々の項目を設けた。自己隠蔽については、日本語版自己隠蔽尺度 (河野、1998、2001) をもとに作成した。また、SNS ブログの利用については自己開示につながる項目として坂本（2010）と同様の項目を設定した。携帯電話を用いたコミュニケーションツールの利用事項については、SNS ブログ別に回答を求めた。本論文では、自己隠蔽について 2014 年と 2018 年を比較分析検討したものを報告する。

今回のアンケートは紙による質問紙と Web による回答の両方でデータを収集した。アンケート実施する際の教示では、研究の目的と意義および研究の方法とプライバシーの保護および不利益防止への配慮について説明し、承諾した人のみアンケートに参加を依頼した。質問紙による回答では同意書を提出した後、アンケートに記入し、終わった人から回収した。Web による回答では、同意書を提出した後、コンピュータ画面にアクセスしてクリックすることで回答を入力した。調査データはすべて対象者番号をつけて扱い、個人が特定できないようにした上で統計的に処理した。分析は SPSS 統計ソフトを使用した。

3. 結果

自己隠蔽の項目ごとの 2014 年と 2018 年の平均値を表 1 に示した。それぞれの質問項目に対して、当てはまらないから、当てはまるまで 5 段階で回答を行った結果である。全体平均では、2014 年の結果で 3 以上の得点項目として「自分について人に話してないことがたくさんある」「隠しておきたいことを知られてしまうことがこわいと思うことがある」「自分

の秘密を話しても、良いことはほとんどないから、できるだけ話さないようにしようと思う」が認められた。2018 年の結果では 2.4 以上 2.8 以下の得点であった。2014 年では偏差値も大きな項目があったが、2018 年ではすべて偏差値が小さくなっていた。すなわち、ほとんどの学生がそのように感じている結果であるといえる。

自己隠蔽の得点を集計した。2014 年では 3 を超える項目は「自分について人に話していないことがある」「かくしておきたいことを知らせてしまうことがこわいと思うことがある」「自分の秘密を話してもよいことはほとんどないからできるだけ話さないようにしようと思う」という項目であった。2018 年ではすべての項目で 3 以下という結果になっている。

表 1　自己隠蔽項目の平均値一覧（2014 年、2018 年）

	2014年		2018年	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
誰にも打ち明けられない重要な秘密をもっている	2.9	4.2	2.7	1.3
自分の秘密はあまりにイヤなもので、他人には話せない	2.9	4.2	2.7	1.2
もし友達に自分の秘密を話したら、友達は私のことを嫌いになると思う	2.6	4.2	2.3	1.2
自分について人に話してないことがたくさんある	3.2	4.2	2.8	1.3
親友にも話せないことがある	2.9	4.2	2.6	1.3
自分を苦しめる秘密を持っている	2.6	4.2	2.4	1.3
何か悪いことが起こったときも人に話さないほうだ	2.9	4.2	2.7	1.2
隠しておきたいことを知られてしまうことがこわいと思うことがある	3.2	1.3	2.9	1.3
自分の秘密を話しても、良いことはほとんどないから、できるだけ話さないようにしようと思う	3.1	1.2	2.8	1.3
自分の秘密について聞かれたときは嘘をつこうと思う	2.8	1.2	2.6	1.1
自分自身について、人に打ち明けられないような否定的な考えをもっている	2.7	1.2	2.6	1.1
自分ことを人に話すことに抵抗を感じる	2.6	1.1	2.5	1.2
人に話しても自分の苦しみは分かってもらえないと思う	2.7	1.2	2.7	1.2

すなわち自己隠蔽度としては 2014 年よりも低い平均値となっているが、各項目で有意差はほとんど認められなかった。平均値から自己隠蔽度の高い群と低い群に被験者を分けて分析を行った。2014 年では高低群間においてパソコンの利用、「1日のパソコンの使用時間」「1 日のパソコンメールの平均数」「1 日の異なる人とのパソコンメールをやり取り人数」「1 日の携帯電話の使用時間」「1 日の携帯メールの平均数」「1 日の異なる人との携帯メールをやり取り人数」の項目において分析した結果、PC 利用時間に有意差が認められたが、2018 年ではどれも有意差は認められなかった。つまりは、全体として自己隠蔽度は低くなり高低群の差がなくなってきているということが示されたと思われる。

学生の日常生活および交友関係について、自己隠蔽度の高低群で比較した。「自宅か下宿か」「学内・学外を問わずクラブ、サークルや団体に入っていますか」「親しい友人の数」「学友たちと楽しくやっている」「学内はうわべだけの表面的な付き合いが多い」の項目についての回答を分析した。その結果、2014 年では友人の数で差が認められたが、2018 年では認められなかった。「学内はうわべだけの表面的な付き合いが多い」（χ =31.48、df=4、$p<0.01$）において 2014 年と同様有意差が認められた（図 1）。

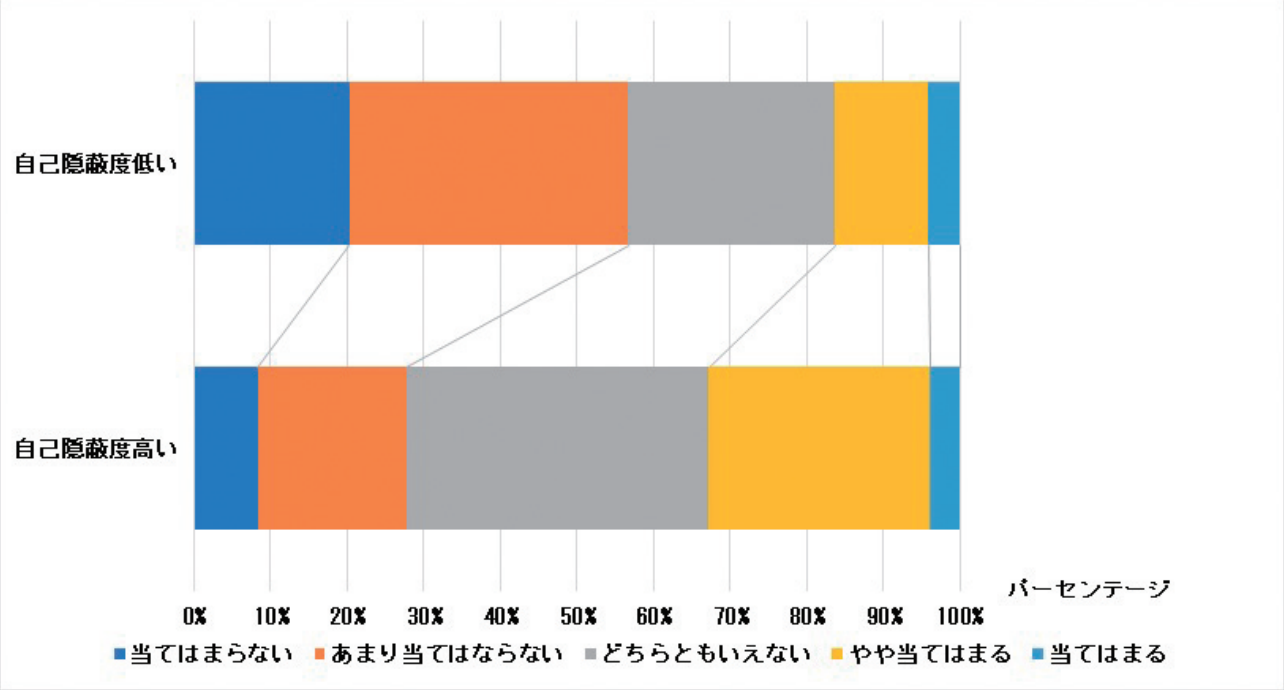

図 1 自己隠蔽度高低群「学内はうわべだけの表面的な付き合いが多い」の回答

友人の人数については、明確な有意差は認められないが、高い群において友人の人数が少ない傾向を示している（図2）。SNS に書き込む内容についての質問事項の中で自己隠蔽度高低群において有意差が認められた項目は、「所属しているゼミやサークルについて」「本・映画・音楽について」は低い群が有意に書き込み、「社会への不平・不満について」「悩みや不安・心配事について」は高い群が有意に書き込まないことが認められた。

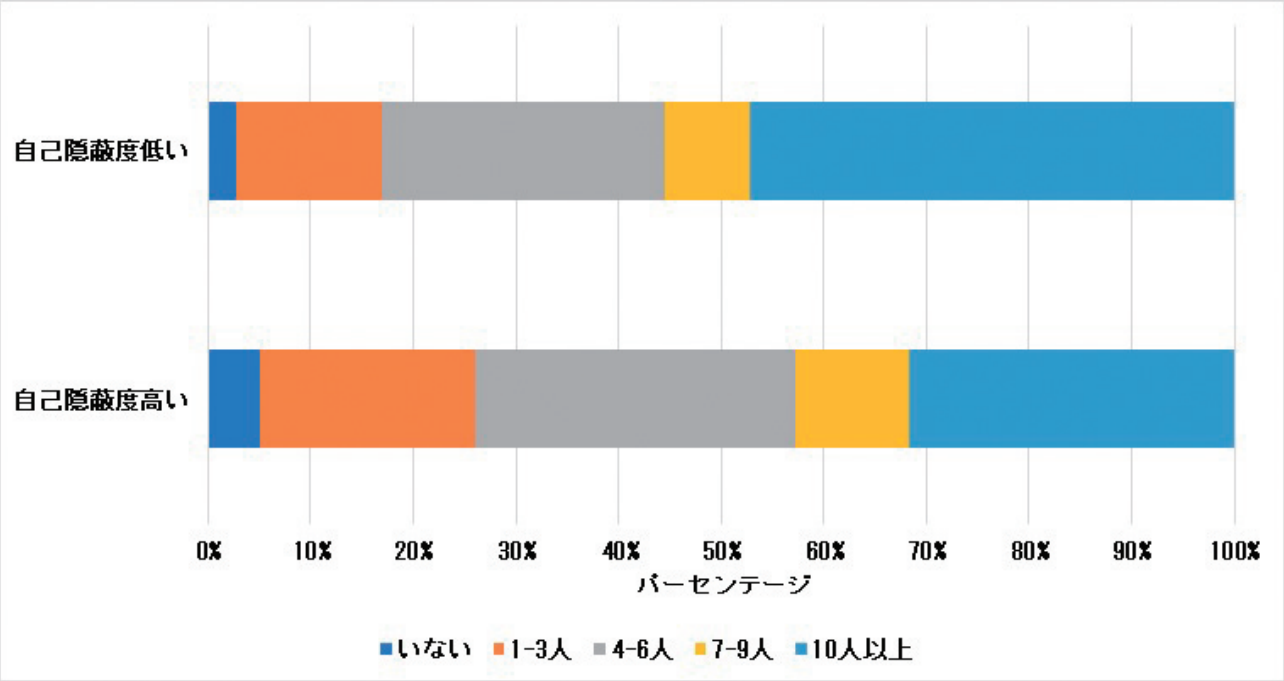

図 2 自己隠蔽度高低群における親しい友人の数

4. まとめ

自己隠蔽については、すべての項目で 2014 年よりも値が小さく、標準偏差についても小さくなっていることが認められる。すなわち、2014 年よりもすべての学生が同じような傾向にあることが示されている調査年度別で有意な差はほとんど認められていない。2014 年における調査では SNS の利用は 2018 年に比較して少なかった。SNS の書き込む内容については、2014 年では自分の日記のように書いていることが多く認められているが、2018 年では情報発信としての利用が多くなっているようである。書き込む内容については 2014 年に比較して個人的なものではなく、サークルについて、本などについての内容を情報発信していくことが多く認められている。

実際 SNS も変化しており、後発の Instagram などは特に写真とコメントで情報発信を行うツールとして認識されており、実際にそのように利用されている。今後さらに新しい SNS が進化していくことで使い方や情報発信の内容について変化していくであろうと思われる。高等教育における情報リテラシー教育では、これらの SNS も含めた情報ツールの常識的な使い方についてしっかり伝達していく必要があると思われる。今後の高等教育機関における情報教育の内容の重要性が示された。

謝辞：アンケート調査の一部は 2018 年度卒業論文として発表しました。質問紙調査についてはゼミの学生である松尾知美さんに協力をいただきましたので記して感謝いたします。

参考文献

1. 中田　美喜子、SNS による大学生のコミュニケーションについて：自己隠蔽度が人間関係に及ぼす影響、国際教養学部紀要、2 号、27-33、2015
2. 目黒公郎 , 大原美保, 沼田宗純［他］, 近藤伸也, 3.11net 東京（東日本大震災復興支援研究者ネットワーク）の活動報告　その1, 東京大学生産技術研究所、生産研究 63(6), 735 − 737, 2011
3. 足立由美、高田茂樹、雄山真由［他］、松本　和雄、携帯電話コミュニケーションから見た大学生の対人関係、教育学科研究年報 29、7-14、2003
4. 高谷邦彦　ソーシャルメディアは新しいつながりを生んでいるのか?～女子学生の利 用実態～、名古屋短期大学研究紀要, 55, pp. 13-27. 2017
5. 尾上恵子, 女子学生の人間関係構築における諸要因について, 一宮女子短期大学紀要 46、15-22, 2007
6. 富士通総研　ユーザ調査レポート　http://www.fujitsu.com/jp/group/fri/report/cyber/research/,（2019/2/20）
7. キャンパスライフ研究会「第 39 回学生の意識と行動に関する研究会」, 全国大学生活協同組合連合会, 2017 年 9 月
8. Instagram　https://www.instagram.com/,（2019/2/20）
9. Twitter　https://twitter.com/,（2019/2/20）
10. LINE　https://line.me/ja/,（2019/2/20）
11. Facebook　https://ja-jp.facebook.com/,（2019/2/20）
12. 日本経済新聞　フェイスブックからの個人情報の流出経路 https://www.nikkei.com/article/DGXMZO29264270R10C18A4X11000/,（2018/12/14）
13. 総務省　http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h27/html/nc242220.html,（2018/12/26）
14. 青山征彦　境界を生成する実践：情報を伝えないことの意味をめぐって、駿河台大学論叢 (41), pp. 207-217. 2010
15. 北村智, 佐々木裕一, 河井大介　ツイッターの心理学. 誠信書房, 2016